

## 今年は彗星の豊年

### 既に新彗 12 個の星を発見

十五年ぶりに地球に大接近する火星の観測に躍起となつてゐる東亞天文協會大阪支部からこんどは「ことしや彗星の豊年です」と“有鬚の星”繁昌記を発表した。この彗星は全體がぼんやり光つて、形は千差萬別だが、草箒に似てゐるのが多いといふわけか、俗に「ほうきぼし」ともいはれてゐる。どこから現れて、どこに消えて行くのか、突きとめられてゐないが、高速度で運行するので、核といふ頭部と、この部分を蔽ふ霧狀の光層と、さらに、この部に接続してゐる光尾が互の引力によつて形を保ちながら運行してゐる。昔はこの星が現れるのを迷信深い人々が怖れたものだが、最近彗星も一つの天體であつて、他のものと同じく、ある一定の法則に従つて天界を運行してゐる太陽系のお客さまであることが明らかにされた。

さて、天文協會の繁昌記によると、本年に入つてすでに12個の彗星が発見されてゐるのである。去る四月23日夜倉敷天文臺の岡林滋樹氏ほか3氏が新らしくみつけた“ユ1アロフ・アシマロフ、ハセル、岡林彗星”をはじめ、コジク・ベルテヤ彗星(一月発見)、ヴィサラ彗星(二月8日発見)の三新星と、三月17日米國リク天文臺のジェフアス氏が発見した有名なボン・キンネケ彗星、四月22日米國ヤーキース天文臺でキャツチしたコブ彗星、南アフリカのヨハネスブルグ天文臺のジャクソン氏発見のジヴスマン・ワハマン第一彗星、六月17日米國リク天文臺発見の第二ブルクス周期彗星、七月24日ソ聯のカミンスキ氏が新彗星を発見、同28日佛のリゴレ1氏が又新彗星を発見、八月12日には上記ジェフアス氏が待望のタトル彗星を発見、十月15日には米國のヴンビーブルク氏がジャコビニ彗星を再発見、最近には米國フレンド氏が十一月4日に新彗星を発見した。此の12個で、このほかドイツのゾンネベルグ天文臺ホフマイスタ1博士も去る四月乙女座近くに一つの小さな遊星らしいものを発見してゐる。

まだ出現を期待されてゐる舊星でも第二ナルフ彗星があるが、これまで発見された12個の彗星のうち世界に大きな話題をのこして北天に遠く姿を消したユ1アロフ・アシマロフ、ハセル、岡林彗星は、その後倉敷天文臺長山本一清博士とプラ1グ國立天文臺グ1ト博士の研究によると、空間に崩壊して流星群を置土産として行つたもののようで、この流星群は八月4日の早曉に東南方の鯨座エ1タ星附近から現れる筈と報じてゐる。東亞天文協會大阪支部では語る

「彗星の搜索は素人にもできる興味あるもので5種か10種位の望遠鏡所有者だつたら十分観測できます。夕方なら西の空、夜明けだつたら東の空を毎日々々根氣よく何か星以外のものゝ出現を注意し、それらしきものがみつかつたら形状(特徴の有無)、光変、位置の移動の具合、その星と附近の星々の位置のスケッチなどを行ひそれがいよいよ彗星と思つたら直に本會の本部や他の天文臺へ報告することが必要です。」